

OTANIING

大谷の「今」を伝える。「未来」へ繋げる!

智身館ウッドデッキから西館を望む

2020.5

vol.220



私は世界を守るための大事な力を持っている

学校長 飯山 等

休校となってきみたちのすがたが見られない間、大谷の校歌のフレーズがしばしば心に浮かんできました。♪これぞ学び舎ああたのし、♪これぞ友どちああゆかし、♪これぞ古里ああうれし、♪これぞ安らぎああやさし。〈学び舎〉〈友どち〉〈古里〉〈安らぎ〉として存在して機能する。そして、《たのし》《ゆかし》《うれし》《やさし》と感受される。その温かさを、学校という存在の意義と使命の根幹とする。この疫禍はあらためて私に、そのことを真正面に据えてものごとを考えよと教えてくれました。皆さんにとってどのような毎日になっていますか。分散登校しての講堂での入学式、マイク放送による始業式、それ以来、学校に行きたくても行けない、友だちと一緒にすごしたくてもできないという状態をながく強いられてきましたが、ようやく明るみの方向を展望できるところまで来ました。皆が集い合って時間と場を共有する。共有するとは、英語では、common(共有)ate(する)であり、それはcommunicateの語源だと辞書にありました。communicateとは、何よりもまず、そしてその有りようを貫いて「気持ちを通い合わせること」です。時と場を共にすることから、気持ちを通い合わせるあり方がわたしたち一人ひとりに開かれるのです。まだまだ不安が払拭されたわけではありませんが、医療体制の備えを確立して、わたしたちが生活の有りようにつけることで、「平常」に復していこうというものです。わたしたちにできることはあります。お互いを大切にしようという心をもって、しっかりとわたしたち一人ひとりの生活の形にしていきましょう。

私の好きな科学者の中村桂子さん(JT生命誌研究館名誉館長)のインタビュー記事(朝日新聞5/6)が目にとまりました。「科学技術の時代に生きる私たちはつい、専門家がコンピューターな

どの機械的な技術を用いてすぐに問題を解決してくれることを期待してしまいがちです。けれど、新しいウイルスの感染を防ぐための最も基本的な手法は、手洗いであることは昔から変わりありません。手洗いは、保育園や幼稚園でも習うことで、誰もができます。誰かが守ってくれるわけではなく、一人ひとりが自分の身は自分で守っていくことが重要です。このことも、生き物としての原点を思い出させてくれます。しかも、手を洗えば、自分を守るだけでなく、身近な人を守ることになり、それを全員が行えば、社会全体を守るにつながります。普段、自分の行為が社会とつながっていると実感できることは、めったにありません。社会には格差や貧困といった問題がありますが、私などは、自分一人の力は小さく、何もできないと無力感にさいなまれることが多々あります。手洗いをすることで『私は世界を守るための大事な力を持っている』ということに一人ひとりが気づき、実感できることは、コロナ禍での大切な学びだと思えます。拡大するウイルスに国境は関係ありません。パンデミックの時代には、経済面だけでなく、世界が一体化するという本当の意味でのグローバル化が求められます」とありました。日本赤十字社がウェブサイトで開催した「ウイルスの次にやってくるもの」と題された動画は、ウイルスへの恐怖が広がって人と人が互いに傷つけあう状況を描いて、「そのような恐怖は、ウイルスよりも恐ろしいかもしれない」と警鐘を鳴らすものでした。排除と差別に傾いてしまう有りよう(それはしばしば正しさを声高に叫ぶ中から生じてきます)から、私たちは何時になれば脱することができて、手を取り合うあり方を、自然な有りようとして確立することとなるのでしょうか。今後、どのような事態となるかは予測不能です。でも、もし、辛い事態になったとしても、「気持ちを通い合わせる」私たちであることを失うことのないようにしたいものです。